式内社・高部屋神社の例大祭

添田　悟郎

The regular festival of Shikinaisha - Takabeya Jinja

Soeda Goro

神奈川県伊勢原市下糟屋に鎮座する高部屋神社は、延長 5 年(927 年)完成の『延喜式』の「神名式(延喜式神名帳)」に記載されている相模国 13 座の 1 社で、拝殿と幣殿、ならびに本殿は平成 28 年(2016 年)2 月 25 日に国の有形文化財に指定されている。境内の鐘楼には至徳 3 年(1386 年)に平秀憲が寄進した銅鐘が現存しており、昭和 44 年(1969 年)12 月 2 日に神奈川県の重要文化財に指定されている。高部屋神社では毎年 9 月の第 3 日曜日に例大祭が執り行われ、祭り太鼓の山車と子供神輿、そして慶応 2 年(1866 年)に杉崎周助政貴によって建造されたと考えられる大神輿が下糟屋地区を渡御する。また、例大祭の 1 週間前の土曜日には平安時代から大磯の照ヶ崎海岸で行われていたとされる「汐汲み神事(汐汲みの儀)」が執り行われ、当神事は明治初年頃の廃仏毀釈(神仏分離)の影響により途切れていたが、明治元年(1868 年)から 150 年目の節目にあたる平成 29 年(2017 年)に正式な神事として復活した。ここでは令和 6 年(2024 年)9 月 15 日(日)に行われた例大祭と、前日の 14 日(土)の宵宮の様子を中心に紹介する。

Takabeya Jinja, enshrined in ShimoKasuya, Isehara City, Kanagawa Prefecture, is one of the 13 shrines in Sagami Province listed in the “Shinmeishiki (Engishiki Jinmyocho)” section of the Engishiki, a compilation of ancient Japanese texts completed in 927. Its worship hall, offering hall, and main hall were designated as National Tangible Cultural Properties on February 25, 2016. The bronze bell donated by Taira no Hidenori in 1386 still exists in the shrine’s bell tower and was designated an Important Cultural Property of Kanagawa Prefecture on December 2, 1969. Takabeya Jinja holds its annual festival on the third Sunday of September each year. During this festival, a float with drums, a children’s portable shrine, and a grand portable shrine believed to have been constructed by Sugizaki Shusuke Masataka in 1866, parade through the ShimoKasuya district. Additionally, on the Saturday one week prior to the annual festival, “Shiokumi Shinji (Shiokumi no Gi)” is performed, which is said to have been held at Terugasaki Beach in Oiso since the Heian period. This ritual had been interrupted around the beginning of the Meiji era due to the Haibutsu kishaku (separation of Shinto and Buddhism) movement, but it was formally revived as an official ritual in Heisei 29 (2017), marking the 150th anniversary since Meiji 1 (1868). In this report, I introduce this annual festival which was held on Sunday, September 15, 2024 (Reiwa 6), and the Yoimiya on the previous day, Saturday, the 14.

１．高部屋神社

「高部屋(たかべや)神社」は延長 5 年(927 年)完成、康保 4 年(967 年)施行の『延喜式』の「神名式(延喜式神名帳)」に記載されている相模国 13 座の 1 社で、伊勢原市内の延喜式内社としてはこの他に阿夫利神社(大山)と比比多神社(子易と三ノ宮が共に論社)が記載されている。由緒によると、創建年代は不詳であるが紀元前 660 年とも言われており、大住郡 127 ヶ村の総社と言われていた。糟屋住吉の大神としてまたの名を「住吉大明神」と呼ばれ、武門・武士を始め万民の崇敬を受けた古社である。江戸時代中期頃までは別名「糟屋八幡宮」と呼ばれ、名社の名を謳われた。

下糟屋に鎮座しているにも関わらず高部屋と名乗る根拠については、高部屋の地に高部屋神社の元宮があったという説があり、平成 25 年(2013 年)2 月に高部屋神社の役員により、上粕屋の高部屋地区にある渋田山(渋田川の源流)において 2 つの祠が発見されている。この場所は古来より高部屋神社所有の飛び地の境内で、この上粕屋の高部屋地区付近一帯は鎌倉時代以前に、糟屋一族の拠点であったと言われている。かつて、渋田山の飛び地には高部屋神社の氏子が全員参拝していたという話があり、現在でも毎年3月の第1日曜日に神社の役員が整備を兼ねて参拝している。

その後は現在の鎮座地より西方 600m ほどの小名「弥杉(いやすぎ)」(東海大学病院周辺)に遷座し、鎌倉時代に糟屋庄(かすやのしょう)の庄司(しょうじ)であった糟屋氏がみずからの館の近くに移したといわれる。『神祇志料』によると当社がもとこの弥杉

にあったのを、のちに現在地に遷祀したものだと記しており、郷土史家の石野瑛氏などもこの説をとっているようである。文明18年(1486年)に上杉定正大般若経函修理等のことがある。下糟屋村の八幡宮は天正19年(1591年)に徳川家康より三之宮村の三宮明神社と同等の十石の朱印状を与えられ、伊勢原市内の神社としては最大の寄進であった。

図 1-1. 渋田山(渋田川源流)

図 1-2. 石祠(元宮)

図 1-3. 弥杉の石祠

図 1-4. 大住大明神の石碑(左側)

天保12年(1841年)完成の『新編相模国風土記稿』によると下糟屋村の鎮守は「八幡宮」で、「當國十三座の内、高部屋神社なり」と記載されていることから、下糟屋に鎮座する八幡宮(現在の高部屋神社)が延喜式内社として認識されている。八幡宮の祭神は次の五座で、中央に應神天皇(神体座像、長二寸、本地佛弥陀)、右に若宮大神(仁徳天皇、神体幣束、下同)と氣長足姫大神(神功皇后)の二座、左に姫宮大神(大日靈貴尊)と住吉大神(表筒男命、中筒男命、底筒男命)の二座であった。末社には「天神」・「稲荷」・「秋葉」・「神明二　内宮　外宮」・「聖天二」・「金毘羅」・「天王」・「水神」があり、「薬師堂」と「観音堂」もあった。更に、『風土記稿』には八幡宮に関して次の記載がされている。

●至徳三年の鐘

高部屋神社の鐘楼には至徳3年(1386年)に平秀憲が寄進した銅鐘が現存しており、昭和44年(1969年)12月2日に神奈川県の重要文化財に指定されている。鐘に刻まれた銘文には「八幡宮」とあり、この頃には既に高部屋神社ではなく八幡宮と呼ばれていたことが分かる。また、「相州大住郡糟屋庄惣社」とあり、この頃に糟屋庄が大住郡(伊勢原全域、平塚市と秦野市のほぼ全域、厚木市の一部)のどの範囲まで及んでいたかは定かではないが、広範囲にわたって崇敬を受けていた神社であることが伺える。伊勢原市内にあった梵鐘・宮鐘の殆どが太平洋戦争の際に供出され、下糟屋の高部屋神社以外の鐘で供出を免れたのは日向の霊山寺(日向薬師)、沼目の天王社、東大竹の八幡神社、下糟屋の大慈寺くらいである。以下に高部屋神社の銘の内容を原文で紹介する。

「　曰、相州大住郡糟屋庄惣社、八幡宮鴻鐘銘、夫当社者、瑞籬最久、威光森明、星霜甚舊、利生倍新、晨晩雲晴、雨排柏城、宵暁月寒、風響宮甍、靈夢靜覺、夜凌五更、鳧鐘待聲、孰驚三聖、因玄？一身微營弘精□、依亡父之宿願、成功□、既醒三熱、眠於棲□寔歸四攝覺於閣遲耳、仰願者、天地長久、國家治世、信心檀那、家門繁昌、息災增福、志弘法界、一切群類利益等、願主平秀憲、至徳三年丙寅十二月日、大工河内守國宗、　」

図 1-5. 鐘楼

図 1-6. 至徳3年(1386年)の鐘

●應永廿八年の石燈籠

社前に応永28年(1421年)の石燈籠があり、この燈籠は現存していない。以下にその銘の内容を原文で紹介する。

「　銘曰、奉彫造相州糟屋惣社、正一位八幡大菩薩御廟前、石燈籠一基、右意趣者、天地清寧、皇風永扇、殊者同東郡元師身宮安泰、壽算綿延、専祈当庄秋山郷地、及藤原某等、家門繁栄、親屬快樂、天下泰平、國土豊饒者也、應永二十八年九月下旬天、勸進主重先敬白、圖左に載す、　」

●八幡宮の造営

八幡宮には幣殿と拝殿および神楽殿、圍二丈七寸の槻(欅)の神木があり、華表(鳥居)には神祇伯資延王が書いた神号の額が掛けられていた。当社は天文20年(1550年)9月に地頭渡邉石見守某が造営したとあり、大工は大山の明王太郎が担当した。以下に棟札の内容を原文で記載する。

「　棟札あり、曰、奉造立、大日本國相州大住郡糟屋庄、八幡大菩薩、大檀那、地頭渡邉石見守、小檀那代官、築城太郎左衛門、別当津師賀順、大工明王太郎、本願主得生、鍛冶当村宣朗助次吉次彦右衛門、天文二十年辛亥、九月廿八日、　」

●境内三ヶ條の法度

天正9年(1581年)5月10日に武蔵国松山城主の上田長則(官位：能登守)により、八幡宮境内における三ヶ条の法度(規則)が定められ、江戸時代の後期まで続いていたと推測される。以下に風土記稿にある社蔵文書の写しの内容を原文で記載する。

「　社藏文書寫曰、相定法度、糟屋之郷八幡御社頭、於左前後、竹木不可剪、扞馬不可繫候事、喧嘩口論不可致候事、扞殺生放火之事、出陣之砌、松山家中衆、別面如斯之法度、致覚悟、以下之者共に、堅可申付候事、右三ヶ條有違犯之輩者、以書付都筑豊後守所へ可申來候、其斷明白可申付候、仍加件、天正九年辛巳年、五月十日、別当法禪坊、能登守長則華押、按ずるに、長則は北條氏の臣なるべし、其氏詳ならず、　」

次に『風土記稿』の下糟屋村の項に記載されている、鎮守八幡宮以外の神社を紹介する

●若宮八幡宮

「若宮八幡宮」は本地佛大日を置き、村民持ちで縁起に記載されている能條太郎兵衛の子孫と云われる。縁起によると仁寿元年(601年)に東三条左大臣の息男であった兵庫頭某が相模国に下向し、その子の岩若丸が当村の豊民であった能條太郎兵衛の家を継ぎ、父の兵庫頭の遺骨をここに納めて若宮八幡と崇めたと伝える。この縁起は延喜17年(919年)に記し、文禄2年(1593年)に

改書したと巻末に記されているが、その文は全て近世のものと見られ“原文は注せず”とある。例祭は 4 月 5 日で、天正 19 年(1591 年)11 月に社領一石五斗の朱印地が与えられた。鐘楼には明和 5 年(1768 年)の鐘を掛け、末社には「稲荷」・「秋葉」・「道了」があった。

●淺間社

「淺間社」は大慈寺持ちで、例祭は 6 月 18 日、天正 19 年(1591 年)に社領二石の朱印状が与えられていたが、寛政 2 年(1790 年)正月の別当寺の火災で焼失し、再発行はついでの時にと命じられたとある。境内には石の小祠 2 つを建て、鐘楼には寶暦 5 年(1755 年)の鐘を掛けていた。

●住吉社／稲荷社

「住吉社」は鎮守八幡宮の境内に祀られ、住吉の元宮と伝えられていた。例祭は 6 月 15 日で、村民持ちであった。八幡宮の境内にはこの他に「稲荷社」も祀られていた。

高部屋神社があるこの地は、千鳥ヶ城と呼ばれる要害が北条氏の滅亡まで社地の続きに存在していたことが最近の調査で認められた。鎌倉時代に源頼朝の家人、藤原鎌足・冬嗣の血を引く糟屋庄の地頭「糟屋藤太左兵衛尉有季」の館跡と言われていて、高部屋神社を守護神として社殿を造営した。室町時代に入ると、将軍・足利氏の家人団・上杉一族の関与があったと思われている。糟屋氏・上杉氏と関わった武士達の興亡をのせてきた高部屋神社も北条氏を迎えた。

図 1-7. 高部屋神社

図 1-8. 拝殿

図 1-9. 幣殿

図 1-10. 本殿

図 1-11. 慶応元年の棟札

図 1-12. 有形文化財のﾌﾟﾚｰﾄ

拝殿と幣殿は慶応元年(1865 年)に相模国梅沢(現材の二宮町)の杉崎周助政貴によって再建され現在に至っている。草葺き屋根の拝殿(横三間・縦二間)の欄間(らんま)には大きな竜の彫刻などを施しており、正面の頭上に山岡鉄舟の筆による「高部屋神社」の社号額が揚げられている。幣殿の北 6m ほど隔てたところに銅葺きの流れ造りである本殿(五間・二間)が独立して建っている。本殿は正保 4 年(1647 年)に元の本殿をそのまま活かして再建されたが、大正 12 年(1923 年)の関東大震災により倒壊したため、昭和 4 年(1929 年)に柱・彫刻・正面扉等の古材を再利用して復興再建したものである。地面より 3m ほどの高さの土台があり、三段に石垣を築いた上に設けられている。正面に向拝があり、周りに回廊をめぐらし、これを支える形のよい柱が四隅に立っており、扉は朱と黒の漆塗りで、木材は全て檜である。

関東の神社一般においてはかなり規模の大きい神社でも、本殿と拝殿はほとんど相接して建てられており、その間を幣殿でつながれているのが普通であるが、当社の本殿は近畿地方のもののように拝殿よりだいぶ離れて独立して建てられている。また、関東の諸社では拝殿は大きくても本殿は一間四方の小さい殿宇(でんう)であるのが普通であるが、当社の本殿は五間二間と大きい。本殿と幣殿の間には享保 12 年(1727 年)の作である一対の狛犬が石台の上に置かれ、以前は拝殿の前にも天保 10 年(1839 年)の狛犬一対が置かれていた。八幡宮(高部屋神社)は明治 6 年に村社に、大正 6 年 7 月には郷社となった。高部屋神社の拝殿と幣殿ならびに本殿は、平成 28 年(2016 年)2 月 25 日に国指定の有形文化財に指定されている。

文明 15 年(1483 年)に上杉定正が寄進した源朝臣・頼重施入の経巻である大般若経の写経が残されている。京都宇治にある黄檗山万福寺 7 世で、中国の福建省・泉州府・晋江県からの渡来僧、悦山道宗筆による「八幡宮」の扁額(元禄初期の作)がある。本殿前の狛犬を寄進した行抜・行白も臨済宗・黄檗派の僧で、別当「糟屋山神宮寺」と共に黄檗派との関係が深かったと思われる。

2．祭神

現在の祭神は主神が「神倭伊波礼彦命(かむやまといわれひこのみこと)/神武天皇」で、相殿(あいどの)として「誉田別命(ほむだわけのみこと)/応神天皇」・「息気長足姫命(おきながたらしひめのみこと)/神功皇后」・「大鷦鷯命(おおささぎのみこと)/仁徳天皇」・「磐姫之命(いわのひめのみこと)/仁徳天皇の皇后」および「三筒男命(みつつおのみこと)/住吉大神」の五神(三筒男命を三神とすれば七神)を祀っている。ところが、『風土記稿』をみると江戸時代末期における当社の祭神は中央が「応神天皇」で、右に「若宮大神(仁徳天皇)」と「息長足姫大神」、左に「姫宮大神(大日?貴尊(おおひるめむちのみこと)・天照大神)」と「住吉大神(表筒男命(うわつつのおのみこと)・中筒男命(なかつつのおのみこと)・底筒男命(そこつつのおのみこと))」となっている。従って現在のイワレヒコノミコトは祭神となっておらず、同神は明治以降において祭神に加えられたものと思われる。

応神天皇を主神にしたことは、当社がその頃八幡宮と称していたことからも肯定される。なお、幕末の鈴鹿連胤(すずかよりたね)の著作にかかる『神社覈録(かくろく)』にも、高部屋神社の祭神は誉田別尊なりとしている。

3．神宮寺

「神宮寺」はかつて八幡宮(現在の高部屋神社)の別当で、「円福寺」が社僧をつとめていた。神宮寺は檀家を持たなかったため、

明治維新の廃仏毀釈(神仏分離)により円福寺と共に明治時代初期に廃寺となっている。神宮寺に関する文化財および資料はごく一部を除き失われており、慶応元年(1865 年)に拝殿が再建された際の棟札で、「別当・神宮寺」と書かれたものが最後である。

高部屋神社の西北方面にある丸山城址公園は丸山城(千鳥ヶ城)の跡地に造られ、かつては高部屋神社と地続きで、神社の西側に神宮寺があったとされている。神宮寺の廃寺に伴い僧の墓石は崖に捨てられたが、大正生まれの者たちの会である「下糟屋大正会」により、埋没した墓石を掘り出して洗い清め、整備したと言われている。僧の墓石は公園の片隅にあり、手前には高部屋神社の社司の墓が並んでいる。

図 3-1. 歴代住職の墓石(奥)

図 3-2. 社司の墓石(手前)

『風土記稿』によると八幡宮の別当は鎌倉建長寺末で糟屋山と号した「神宮寺(臨済宗)」、社僧は岡崎金剛頂寺末で照林山と号した「圓福寺(古義真言宗)」であった。本尊はそれぞれ神宮寺が釈迦、圓福寺が不動であった。神宮寺を開山(寺院を建立)したのは大本師崇山(康永 2 年(1343 年)2 月 6 日卒)で、海岳(慶安元年(1648 年)5 月 3 日卒)が中興(復興)している。本社条に引用された天正 9 年(1581 年)の文書に別当法禪坊とあることから、法禪坊を神宮寺の旧号と考察している。

『風土記稿』の下糟屋村内の寺院にはこの他に、鎌倉建長寺末で千秋山と号す「普濟寺(臨済宗)」があり、慶安元年(1648 年)8 月に寺領十石の朱印状が与えられ、同じく建長寺寺末の法雨山と号す「大慈寺(臨済宗)」は中興開基を大田道灌とし、芝増上寺末(現東京都港区)で東臺山西光院と号す「南蓮寺(浄土宗)」、鎌倉比企谷妙本寺末で學清山と号す「法眼寺(法華宗)」が記載されている。

4．能條家と若宮八幡宮

下糟屋には能條家の一族を中心として「若宮神社」が祀られ、『風土記稿』に記載されている「若宮八幡宮」のことである。下糟屋の草分けは能條皎家であるといわれ、能條家は文徳天皇の仁寿元年(851 年)に、藤原氏の子孫が女と駆け落ちして津久井郡の能條太郎兵衛に匿われ、その子であった岩若丸が下糟屋の地に家を創設したことが始まりと伝えられている。

図 4-1. 若宮八幡宮

図 4-2. 社殿

昭和 60 年(1985 年)頃の戸主で 60 代目となり、この能條家本家とその分家の家々で、能條家の氏神である「若宮神社」が祀られている。なお、下糟屋では能條家の他に、鈴木・高橋・萩原・山田などの姓が古くからの家と言われている。昭和 60 年頃の祭りは正月 2 日に行われており、神主を呼んで能條三家(東能條・西能條・中能條)が出席して祭典が執り行われている。例年、20 数件の家からオソナエがあげられている。

5．下糟屋の歴史

下糟屋は糟谷・粕屋(谷)とも記すが、明治前期には下糟屋村が正式な表記となる。古くは上粕屋村と一村をなし、室町時代の僧万里(ばんり)の著わした『梅花無尽蔵』によると「文明十七年(1485 年)九月晦日、関本を出でて糟屋に宿す」とあり、そのころには上下糟屋の区別はなかったようである。それから百余年を経た天正 19 年(1591 年)に村内の神社に下付された朱印状には「上粕屋郷」と記されてあるので、その中間の時期に始めて上下の区分ができたと考えられる。古くは毎月五・十の日に市が立てられたが、江戸時代の初頭には廃絶している。

江戸時代当初は直轄地で、寛永 10 年(1633 年)の地方直しにより旗本中川忠次・若林包盛・宇都野正長に分地され、残余は直轄地として残された。明暦 2 年(1656 年)に直轄地を分割して旗本御手洗定重領となったが、元禄 4 年(1691 年)にその子の四兵衛某は失心により職を解かれ、領地を没収されて直轄地に戻された。元禄 10 年(1697 年)の地方直しにより直轄地の一部が岡部直好領となり、享保 13 年(1728 年)に残りの直轄地が下野国烏山藩主大久保常春領となった。以後、旗本中川・若林・宇都野・岡部と烏山藩領の五給の村として幕末まで続いた。なお、若林氏領は天明年間(1781～89 年)頃に一旦上知された後、同氏に返還されている。検地は貞享 2 年(1685 年)に直轄地のみを、成瀬五左衛門重頼・八木仁兵衛長信によって実施されている。

下糟屋村は平塚大助郷になり、矢倉沢道の馬継がなされ、北は愛甲郡愛甲村へ一里、南は伊勢原村へ一八町の継ぎ立てをし、大山道では西側の上粕屋村へ一里、東側の戸田村へ一里の継ぎ立てをなした。文政寄場組合は伊勢原村外二四ヶ村組合に属した。高森村より矢倉沢道が村内に入り、集落の中央を東西に幅二間で通り田中村へと向かった。集落の西部で矢倉沢道が分かれる伊勢原道が幅二間で南に向った。また村の東部で戸田村から下落合村を経て通る大山道と、上谷村を経て通る田村道が矢倉沢道に合流し、共に道幅は二間とされる。集落の南側の淵を渋田川が幅五間で東西に流れ、ここにせきと橋と横町橋が掛かり、高さ九尺の堤を設けていた。集落の台地の北側を歌川が幅二間で流れ、ほかに筒川が幅二間で流れていた。村内の小名には「横町(よこちょう)」・「宮坂(みやさか)」・「琵琶久保(びわくぼ)」があり、高札場は一ヶ所であった。

明治 22 年(1889 年)に成瀬村ができると下糟屋は成瀬村に属したが、下糟屋の西方に隣接して「高部屋村」という一村があり、上粕屋などはこの高部屋村に属していた。これはむかし、この辺りが「高部屋郷」と呼ばれたことがあったとの故事に基づいてその地名を復活したものと思われるが、下糟屋は高部屋村ではなく成瀬村の方に編入された。成瀬村時代の下糟屋は村内で最大級の世帯・人口数を有し、明治以降から第二次世界大戦前まではほぼ 100 戸前後で構成されてきた。明治中期以降の宿場町の衰退、大

正 12 年(1923 年)の関東大震災や第二次世界大戦を契機に、家の盛衰がかなり激しかったことが伺える。戦後は主に分家慣行により漸次世帯数が増加し、昭和 40 年(1965 年)代に入ると小田急線伊勢原駅から比較的近いことにより、東京や横浜の近郊地として外部からの転入が始まった。昭和 50 年(1975 年)に東海大学医学部付属病院が完成すると、地元の人々によって病院の夜勤務者や学生を対象とするアパート経営なども始まり、下糟屋の世帯数と人口は激増した。

下糟屋の地区区分で最大の範囲は「カミ」・「シモ」の地区を二分する単位で、集落のほぼ中央に位置する普済寺の前の道路を境に、西側がカミ、東側がシモである。この集落を二分する単位は下記のように村の生活に根付いていた。

①かつては氏神の祭礼日に両区域にそれぞれ幟を立てた。
②昭和 12,13(1937,38)年に公会堂が設けられる以前は、青年会の集会は両方に分かれて開催されていた。
③昭和 14,15(1939,40)年までは婿養子は結婚後にムラ中全戸へ挨拶に回り、その後はカミ・シモそれぞれ所属する範囲の家に縮小された。
④戦後、生産組合は両区域に分けて組織されている。

現在、このカミ・シモをさらに地区的に細分する単位は「町会」で、カミには「弥杉」・「久保」・「丸山」・「中宿」の 4 町会が、シモには「本宿」・「下宿」の 2 町会が含まれる。この町会という名称は昭和 40(1965)年代後半から使用され始め、それ以前は現在の町会に相当する組織を「更生区」と呼び、更生区は 1 から 5 までの 5 区に分けられていた。

下糟屋は旧高部屋村の地内に字の飛地を有しており、すなわち「渋田山」で、この山は江戸時代には上粕屋(高部屋村)と下糟屋の共有山であった。しかし、渋田山はその後に分割され、近代には下糟屋の持ち分として約 17 町歩が有された。ところが大正 7 年(1918 年)頃に高部屋神社が県の管轄下に置かれることになり、それについては神社に資産が必要であったことから、下糟屋では共有山を神社名義の財産に変更した。それ以前の共有山は時に薪の調達などに利用され、入会地としての性格を持っていたが、名義変更によりムラの人々の立ち入りは大きく制限されることとなった。とはいえ、下記の様にある程度の使用権は保持されていた様である。

①関東大震災の後には各家に木材を分けた。
②字内の橋の架け替えには山の木を利用できた。
③薪の値段が高騰した大正の後期から 12、3 件の家で神社に使用料を払って薪山として利用し、それはガスへのエネルギー転換が進む昭和 30 年(1955 年)頃まで続いていた。

戦時中の木材の供出で荒れた山に、終戦直後は「ムラ仕事」として各家から人が出て植林やその育成が行われたが、結局その利益は享受できないままになっている。一部の山は戦後の農地改革で畑に開いて払い下げられたため、昭和 60 年(1985 年)時点では約 12 町歩となっており、山の維持と管理(見回りなど)は氏子総代と自治会役員に任せられている。戦前には神社の役職として氏子総代以外に、「渋田係」という山の管理を担当する役員が 3 名選ばれていた。

６．祭礼の歴史

本祭の祭日は天保 12 年(1841 年)完成の『新編相模国風土記稿』によると旧暦の 7 月 7 日で、明治 20 年(1887 年)の『下糟屋村外六ケ村地誌』によると 10 月 10 日になっている。祭日は第二次大戦後も 4 月になったり 10 月になったりその時々で変更されてきたが、昭和 50 年(1975 年)代以降は 9 月 15 日に定着し、近年は 9 月第 3 日曜日となっている。大祭のほか正月、2 月、11 月、12 月に小祭を営む。以下に、9 月 15 日に例大祭を行っていた頃の、祭礼の流れを紹介する。

祭礼は 9 月 13 日の幟立てから始まったが、昭和 30 年(1955 年)代の前半頃から幟は立てられなくなっている。幟は 2 枚を 1 組としてそれぞれに「高部屋神社」と「八幡大菩薩」と書かれており、神社前、中宿と下宿の境、宮坂、弥杉の 4 ヵ所に矢倉沢往還を挟んで立てられた。

翌 9 月 14 日には「汐汲み」または「汐汲みの儀」と呼ばれる神事が行われ、6 つの町内が年番で務める宮当番が大磯町の照ケ崎海岸へ出向き、シオ(海水)一升、海藻のホンダワラと砂を採ってくる。汲んできた海水は一升瓶に入れたまま「鎮火水」と書いた紙を張って神前に供え、ホンダワラは注連縄につけて拝殿の入り口と鳥居の 2 ヵ所に飾り付け、砂は拝殿に保管しておく。戦前までは 14 日のヨミヤに神楽や芝居を厚木の方から呼んでいた。カカリ(費用)を出すとツボ(桟敷)がとれ、さらにハナ(寄附)を掛けると前の方の良いツボがとれたという。カカリアツメ(費用集め)は宮総代がする建前であったが、役者との交渉や段取りなどはすべて若い衆にまかされていたという。

9 月 15 日の本祭には高部屋神社の隣に建つ公会堂へ午前 9 時 30 分頃までに関係者が集まり、砂も拝殿より公会堂へ移しておく。10 時に公会堂から砂まき(1 名)を先頭にして、錫杖(2 名)、宮総代(1 名)、宮司(1 名)、神官(2 名)、役員の順で行列を作り神社の拝殿まで行進する。砂まきは盆に盛った砂を撒いて道を浄めながらゆっくりとした足取りで進む。かつては出発前に関係者が公会堂に一座してお茶が出されており、また公会堂ができる前はヤドを務める宮当番の家から出発していた。行列が拝殿入り口に着くと御祓いをうけてから昇殿して式典が執り行われる。神前には鎮火水と共にスルメ・コブ・オソナエ(カガミモチ)・赤飯・尾頭付き(魚を 2 尾腹合わせにして供える)・野菜(ショウガ・ネギ・ナス・サツマイモなど)・御神酒が供えられる。式典終了後は公会堂に関係者一同が会して直会が行われる。

12 月末の高部屋神社の大祓と正月六日の消防団の出初式には 9 月 14 日に採取した「鎮火水」が用いられ、大祓いには神社の北に祀られている水神近くに生えている芹を採ってきて宮司宅で微塵切りにし、それを本祭りの際に神前に供えた一升瓶の鎮火水に入れる。出初式には神前に供えてある鎮火水を下げて防火水槽と神社拝殿の屋根にふりかけ、それから各家を回って庭先に出してあるバケツに注ぎ入れたり、屋根に少しずつふりかけた。

昭和 60 年(1985 年)頃の下糟屋の宮総代 6 名は各チョウナイ

(町内)から話し合いで1名ずつ選出され、任期は一応2年であるが、辞める時は後任者を推薦して他の宮総代の承認を受けなくてはならない。宮総代は高部屋神社の全行事に正装して参加することになっている。また、宮当番といわれる役があり、弥杉・久保・丸山(上宿)・中宿・本宿・下宿の6つのチョウナイが年番でつとめる。宮当番にあたったチョウナイでは20名程度が出て、宮掃除・注連縄張り・直会の準備・後片付けなどをする。なお、神社の祭典等の諸費用はアザヒ(字費)として各戸 1,000 円ずつ徴収して、そこから出している。

7．汐汲み神事(汐汲みの儀)

現在の高部屋神社の例大祭は毎年9月の第3日曜日に行われ、例大祭の1週間前の土曜日に「汐汲み神事(汐汲みの儀)」が執り行われる。当神事は平安時代から大磯の照ヶ崎海岸で行われていたとされ、江戸時代までは僧侶が祭司を伴い執行したという言い伝えがあり、徒歩で照ヶ崎を往復していたと思われる。明治初年頃までは宮当番が神主を伴って照ケ崎海岸まで出向き、「受け取りの儀」を執り行っていたという。そして汲んできた海水で赤飯を蒸して神饌とし、砂は本祭の前に祭場となる社殿とヤドから拝殿までの通路を清めるために一部を撒いていたという。また、高部屋神社の旧社地だといわれるところに住吉様(住吉大明神)の石祠が祀られているが、住吉様に採ってきた海水・ホンダワラ・砂を供えて「仮祭り」をしていたとも伝えられている。

当神事は明治初年頃の廃仏毀釈(神仏分離)の影響により途切れ、昭和23年(1948年)頃まではこの汐汲みの役は青年会が担当していたという。その後は神社総代が使者として大磯まで出向き、海水・海藻・浜砂を採取して高部屋神社に持ち帰っていた。そのような状況で、全国でも非常に珍しい高部屋神社の汐汲みを復活させたいという思いから、明治元年(1868年)から150年目の節目にあたる平成29年(2017年)に正式な神事として復活させ、同年の9月9日(土)に約150年ぶりの汐汲み神事が行われた。

現在の汐汲み神事は高部屋神社と大磯の照ヶ崎を車を使って移動し、照ヶ崎の海岸で伊勢原大神宮の宮司を祭主として神事が執り行われる。照ヶ崎の砂浜に忌竹(結界)を立てて茣蓙の上に祭壇を準備すると、氏子総代の挨拶で汐汲み神事が開始され、修祓や献饌、祝詞奏上などが行われる。神事の途中で白丁姿の3人の使者役が順番に呼ばれると「オー」という返事をし、3人は海へ入って海水、馬尾藻(ホンダワラ)、浜砂の順で採取し、これらは宮司に手渡されて祭壇に奉納される。なお、ホンダワラは事前に入手したものを重石に結び付けて海に沈めておき、鎌(カマ)で根元を切り取って採取する。その後は玉串拝礼や撤饌などが行われ、最後に宮司の挨拶で約30分間の神事が終了する。

神事後に浜砂は追加で採取され、海水は一升瓶いっぱいに汲まれる。なお、3名の使者役は下糟屋自治会の自治会長1名と高部屋神社の役員1名、そして下糟屋地区代表1名の計3名となっている。海から採取した3種は高部屋神社に持ち帰られ、ホンダワラは鳥居の注連縄に飾られ、浜砂は金網のふるいで濾過して例大祭の「浜砂撒きの神事」で清めの塩の代わりとして使われる。海水は火難除けを祈願して、「鎮火水」として地元の消防団が地域を回る際に霧吹きを使って建物などに吹き付ける。なお、この「鎮火水」の名そのものは明治35年(1902年)の下糟屋の火災以来のものと言われている。以下は令和7年(2025年)9月6日(土)に行われた汐汲み神事の様子である。

図7-1. 汐汲み神事

図7-2. 白丁姿の3名の使者役

図7-3. 柄杓で海水を汲む

図7-4. 鎌でホンダワラを切り取る

図7-5. 竹筒で浜砂を採取

図7-6. 神事で使われる道具

この汐汲み神事では何故、遠く離れた大磯の海岸まで移動して神事を執り行っていたかは分かっていないが、高部屋神社の歴史を研究している同神社の元総代である服部登志夫氏によると、日本書紀に書かれている天智天皇5年(666年)に高句麗から日本へ来た使者であった玄武若光(高麗若光)との関係を指摘している。高句麗は668年に唐と新羅の連合軍に滅ぼされているが、若光はその後、高句麗へ戻らずに大磯の高麗地域を拠点に大陸文化を持ち込み、相模国の開拓・発展に関与したと考えられている。

服部氏によれば高部屋神社とその祖神である「住吉大神」との関係を次のように推測している。大山の山頂に祀られているのは海の守り神である「鳥石楠船神(とりいわくすぶねのかみ)」で、後の「石尊大権現(せきそんだいごんげん)」である。そして大山の麓の日向地区に白髭神社(現在の日向神社)があり、御神体は若光とも言われる白鬚明神である。霊亀2年(716年)に若光が埼玉県日高市に移る前に、拠点である大磯の高麗から平塚市の白鬚橋(現在の矢崎に架かる橋)を通り、高部屋地区の渋田川の源流がある澁田山の古来の祭場に、若光が高句麗を出航してから航海の神として崇めていた「住吉大神」を、海の守り神の山である大山の麓にあえて合祀したと推測している。

8．宵宮

8-1. 準備

ここからは令和6年(2024年)9月14日(土)の宵宮の様子を紹介する。宵宮当日は朝8時30分に高部屋神社に集合し、社殿や神楽殿の掃除、幟の支柱立て、神輿や山車の準備などが行われる。なお、幟は竿の老朽化により上げることが困難な状態であるため、

支柱のみを地中に固定するだけで幟を上げていないが、支柱だけでも非常に重厚感があり、支柱に取り付ける彫刻もまた非常に精巧に彫られている。昼食を挟んで午後も準備が行われ、お宮関係の準備は 15 時 20 分頃に、神輿の準備は 17 時頃に終了した。

図 8-1. 浜砂を濾す

図 8-2. 幟支柱立て

図 8-3. 子供神輿の準備

図 8-4. 山車の組み立て

図 8-5. ホンダワラの取り付け

図 8-6. 大神輿の準備

8-2. 山車巡行

太鼓連は 17 時過ぎから宵宮の巡行に向けて準備を進め、18 時からは伊勢原大神宮の宮司によって、山車の巡行に際して式典が執り行われる。式典が終わると山車は高部屋神社を出発し、約 2 時間半かけて下糟屋地区を巡行する。巡行後は境内で直会を行い、22 時頃に解散となる。なお、宵宮の夜から大祭の朝 6 時までは警備会社に依頼し、警備員 2 名が夜通しで警備にあたる。

図 8-7. 出発式

図 8-8. 玉串拝礼

図 8-9. 山車の巡行

図 8-10. 太鼓連の直会

9．大祭

9-1. 準備

ここからは令和 6 年(2024 年)9 月 15 日(日)に行われた大祭当日の様子を紹介する。大祭も宵宮と同様に 8 時 30 分にお宮へ集合し、祭壇の準備やテントの設営などが行われる。9 時 50 分頃になると太鼓連により祭り囃子が演奏され、大磯の汐汲み神事で採取したお清め用の浜砂が社殿周りに撒かれる。

図 9-1. 前日に並べた胡床

図 9-2. 本殿への渡り廊下

図 9-3. 祭壇の準備

図 9-4. 掲示板にのしを貼る

図 9-5. 太鼓の演奏

図 9-6. 社殿周辺に浜砂を撒く

9-2. 浜砂撒きの儀～例大祭式典

社殿周りに浜砂を撒き終わると、神社役員と伊勢原大神宮の宮司らは下糟屋公会堂へ移動し、10 時丁度になると公会堂を出発して砂を撒きながら高部屋神社へ移動する。一行は鳥居を潜ると手水舎で身を清め、御祓所前で修祓を行ってから社殿にて例大祭の神事が執り行われる。

図 9-7. 浜砂撒きの儀

図 9-8. 手水舎での清め

図 9-9. 修祓

図 9-10. 例大祭式典

9-3. 子供神輿発御

例大祭の神事が終わると大神輿に御霊が入れられ、12 時過ぎ

になると子供神輿で出発式が執り行われる。神事が終わると子供神輿は高部屋神社を出発して、大神輿よりも先に下糟屋地区を巡行する。

図 9-11. 御霊入れ

図 9-12. 忌竹の設置

図 9-13. 子供神輿前で神事

図 9-14. 子供神輿の渡御

9-4. 神輿渡御

子供神輿が高部屋神社を出発すると大神輿前では発輿祭が執り行われ、神事後は高神會の司会進行で友好団体の紹介が行われる。式典が終わると一本締めで神輿が担がれ、境内で甚句を交えながら神輿を揉み、13 時 15 分頃に高部屋神社をお発ちする。神輿は高張提灯に先導されながら、台車を併用してして渡御する。

図 9-15. 発輿祭

図 9-16. 太鼓の演奏

図 9-17. 境内で神輿を揉む

図 9-18. 神輿がお宮をお発ち

高部屋神社をお発ちした神輿は最初に西へ向かい、国道 246 号を渡って東海大学医学部付属病院前を通過し、下糟屋地区の西端付近にある弥杉御旅所にて最初の休憩を取る。神輿渡御の休憩場所は全部で 5 箇所あるが、御旅所は弥杉と下町並の 2 箇所だけで、御旅所では伊勢原大神宮の神職によって神事が執り行われる。

図 9-19. 国道 246 号を横断

図 9-20. ご祝儀を頂く

弥杉の御旅所を出発した神輿は来た道を引き返し、東海大学医学部付属病院前を過ぎたところで右折し、国道 246 号の下を潜って反対側へ抜け、渋田川沿いに進んでバス通りに出る。バス通りに出て左折すると直ぐに右折し、上町並公園で 2 回目の休憩を取る。

図 9-21. 東海大学病院前を通過

図 9-22. 御旅所での神事

図 9-23. 渋田川沿いを移動

図 9-24. 上町並公園で休憩

上町並公園を出発した神輿は再びバス通りに出て右折し、そのまま北上して洋服の青山の店舗裏で 3 回目の休憩を取る。なお、子供神輿は大神輿とは別ルートで渡御し、大神輿よりも先に宮入りする。また、大祭での太鼓の山車は殆どの時間を境内で過ごし、大神輿の宮入りの直前だけ境内を出て大神輿を先導する。

洋服の青山をお立ちした神輿は東へ向かい、新興住宅街を抜けて途中で南下し、再びメイン通りに戻る。メイン通りに出て左折すると更に東へ向かい、小田急線の踏切を渡って渋田川に合流したところで左折し、下町並の御旅所で 4 回目の休憩を取る。ここは御旅所なので、御旅所祭が執り行われる。

図 9-25. 洋服の青山に到着

図 9-26. 療養センターを通過

図 9-27. 入居者が見学

図 9-28. 高張提灯が神輿を先導

図 9-29. 小田急線を横断

図 9-30. 下町並での御旅所祭

下町並の御旅所を出発した神輿は来た道を引き返して西へ進み、途中で山車に先導されながら高部屋神社方面へ直進し、友禅ふく和で最後の休憩を取る。なお、山車は休憩場所で止まらずに先に宮入りし、高部屋神社の神楽殿では余興として向上高等学校のチアダンス部の演技が披露される。

ちなみに同校のチアダンス部は令和6年(2024年)2月5日に、アメリカフロリダ州で行われたチアダンスの世界大会で Game Day 部門に出場して同部門で1位、さらに全部門を通じた総合優勝に輝き、世界一の称号を手にした。高部屋神社の例大祭での演技前にはチアダンス部の世界一を祝して、神社役員によって記念品が手渡された。

図 9-31. 御旅所を出発

図 9-32. 山車が神輿を先導

図 9-33. 最後の休憩場所に到着

図 9-34. 山車が先に宮入り

最後の休憩場所である友禅ふく和をお立ちした神輿は、鳥居前で甚句を入れながら暫く揉み、19時10分に宮入りした。神輿は甚句を交えながら境内で揉まれ、芯出しを終えて馬の上におろされると、最後は高神會会長の三本締めで神輿渡御が終了する。宮付け後は直ぐに神輿から御霊が抜かれ、友好団体は境内で直会を行う。

図 9-35. 鳥居前で神輿を揉む

図 9-36. 社殿前で芯出し

図 9-37. 三本締め

図 9-38. 御霊遷し

9-5. 余興、還御祭、片付け

神輿が宮付けされると社殿では還御祭が執り行われ、神楽殿では余興としてビンゴ大会と餅撒きが行われる。19時50分には全ての行事が終わり、21時頃まで後片付けが行われ、残った片付けは翌日に行われる。

図 9-39. 還御祭

図 9-40. ビンゴ大会

図 9-41. 餅撒き

図 9-42. 神輿を八坂神社へ収納

１０．神輿

高部屋神社には大神輿1基と子供神輿1基があり、大神輿は令和5年(2023年)に「神輿提灯工房 茅ヶ崎神輿康」で修復が行われ、その際に見つかった神輿内部の『慶應二丙寅歳八月吉日』の墨書から、慶応2年(1866年)の建造である可能性が高い。また、高部屋神社の社殿には慶応元年(1865 年)の棟札が残されており、神輿の墨書と社殿の棟札の書体が非常に似ているため、棟札に記載されている相模国梅沢(現二宮町)の宮大工であった杉崎周助政貴が高部屋神社の神輿を建造したと推測される。神輿に使われている彫刻は全体的に非常に精巧に仕上げられており、桝組の鳥(ふくろう)や戸脇で仰向けになって腹を見せる龍は非常に珍しい。なお、神輿の屋根は真鍮の板金仕上げになっているが、新造当時からかのものか途中で変更されたかどうかは定かではない。

図 10-1. 高部屋神社神輿

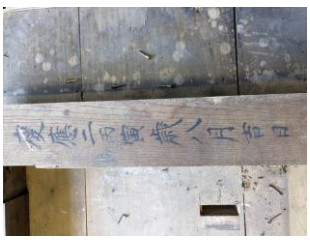
図 10-2. 慶應2年の墨書き

図 10-3. 鳥の彫刻

図 10-4. 腹を見せる龍

令和5年(2023)年の修復で慶應2年(1866)の墨書が発見される前は、大正12年(1923年)9月1日の関東大震災で神輿が潰れ、現在の神輿はそれ以降に造られたものであると考えられていたが、実際は新造ではなく修復された可能性が高いと推測される。その神輿再建の中心を担ったのは当時の青年会で、当時の部落総代に神輿の再建を何回も願い出たが聞き入れられなかったため、米の販売などで貯えた青年会の資金と有志の家から募った寄付

金で再建された。

関東大震災後の修復は神輿内部の墨書と金属板の文字から、昭和 9 年(1934 年)10 月に中郡吾妻村梅沢の大工棟梁であった、野谷長吉によるものと推測される。金属板には震災によって倒木した樹木によって神輿が壊滅したとあり、修復の経緯および 12 名の建築委員の名が刻まれている。なお、屋根の一部が継ぎ接ぎ状態になっているが、これは神輿の修復時のものだと言われている。八坂神社神輿は八坂神社の社殿を神輿殿として保管されている。

図 10-5. 昭和 9 年の墨書き

図 10-6. 棟梁野谷長吉

図 10-7. 昭和 9 年の金属板

図 10-8. 板金屋根の修復跡

図 10-9. 子供神輿

図 10-10. 八坂神社(神輿殿)

修復された神輿は昭和 30 年(1955 年)代の前半頃まで担がれていて、当時は三之宮比々多神社と同じ「ヤートーサッセ」の掛け声で担いでいた。青年会の 35 歳くらいまでの若い衆 30 人で担いだが、90 貫(約 340kg)という重い神輿なので 50 人くらいが交代で担いだ。渡御の行列は太鼓 3 名(担ぎ手 2 名、打ち手 1 名)、猿田彦 1 名(矛を持ち面をつけて足駄を履く)、榊 2 名(白木の枠に横木を渡し、中央に榊を飾り付けたものを前後で担ぐ)、神輿 40～50 名、神主の順であった。渡御の順路は神社→宮坂→弥杉→宮坂→神社→中宿→本宿→下宿→菖蒲田→下宿→中宿→神社の順で、途中で神輿を降ろして休むところは弥杉、久保、丸山と中宿の境、本宿と下宿の境の 4 ヵ所くらいであった。なお、高部屋神社の祭礼で子供神輿が出るようになったのは近年になってからである。

昭和 30 年代の後半頃から神輿は担がれなくなったが、太鼓連の復活の声が上がった当時から、一部の人たちのあいだで神輿の巡行も復活させようという意見があった。しかし、神輿の修復に相当の金額が必要なこと、また昭和 52 年(1977 年)に山車を復活させた時でさえ巡行には小田急線と国道 246 号線を横断するため警察の許可が簡単には下りず、折衝の末ようやく昔からの習慣だからということで承認された経緯から、神輿の巡行となるとその折衝も容易ではないことなどを理由に、神輿の復活は自治会で公的な話題にならなかった。しかしながら、平成元年(1989 年)頃に高部屋神社の神輿会として「高神會(こうじんかい)」が結成され、初代会長の斎藤勇らの尽力により神輿渡御が復活した。なお、神輿を担ぐ時の掛け声はこの時から「どっこい」に変わっている。

１１．囃子

下糟屋では「下糟屋太鼓連」が祭り囃子を伝承しており、現在は「ブッツケ」と「屋台(ヤタイ)」のみが伝承されている。高部屋神社の祭礼において下糟屋太鼓連は山車の巡行を行うが、メインは宵宮の夜の巡行で、大祭当日は神輿の宮入り前に先導役として巡行し、それ以外は境内で太鼓を叩く。

下糟屋太鼓連は例大祭の 1 ヶ月前から高部屋神社の境内で練習を行っており、令和 6 年(2024 年)は 7 月 20 日(土)から 9 月 7 日(土)の毎週土曜で、時間は 19～20 時の 1 時間となっている。写真は令和 7 年(2025 年)8 月 9 日(土)に行われた練習の様子である。

図 11-1. 山車(側面)

図 11-2. 山車(正面)

図 11-3. 太鼓の練習

図 11-4. 初心者への指導

かつて下糟屋では青年会の内部に神社の祭礼や盆踊り、また普済寺の 4 月 19 日の「半僧坊」の祭礼に、「大太鼓」・「小太鼓」・「横笛」・「擦り鉦」からなる楽器で音曲を披露する太鼓連の組織が古くから伝えられてきた。太鼓連は下糟屋のほか、成瀬村の周辺では伊勢原の池端、東大竹などに組織されていた。下糟屋と池端は相互の神社の例祭に往来して太鼓を競いあう「ツキアイ村」で、下糟屋は東富岡と付き合いを行ったこともあった。下粕屋の太鼓連は青年会存続当時は会員全員がメンバーに入るのではなく、内部で関心・興味をもつ者の任意参加となっていた。太鼓の技術や音曲をいつの時代にどこから受け入れたかは定かではない。

かつては、現在叩かれている「屋台(ヤタイ)」以外にも、奏楽順に「マモノ」・「神田丸」・「下がり藤」・「鎌倉」・「仕丁舞」・「ニンバ」というそれぞれ曲調の異なる 6 曲が伝えられていた。下糟屋では先人が手書きで書いた譜面を平成 4 年(1992 年)から平成 23 年(2011 年)の間にまとめた譜面が残されており、それらを表にまとめたものを下記に記載する。下糟屋の囃子は伊勢原市池端や平塚市城所などと共通点が多く、池端は明治年間(1868～1912 年)に城所から習ったという伝承があることから、下糟屋の囃子も城所との関係性が強いと推測される。

「マモノ」に関しては平塚市の城所ばやしの「昇天(しょうてん)」や入野ばやしの「ジショウデン」と類似している。入野ばやしには「間物(マモノ)」という「ジショウデン」から始まる組曲が現在でも伝承されており、下糟屋では「ジショウデン」ではなく組曲の名称である「間物(マモノ)」がそのまま曲名として捉えられた可能性が考えられる。また、「下がり藤」という曲名に関しては、同系統の囃子では聞いたことはないが、譜面からは城所ばやしの「追馬・大間(おおま)」と同じものだと思われる。

囃子の曲目

	曲名	備考
1	ブッツケ	“そうりゃ”の掛け声で屋台に入る
2	屋台 (ヤタイ)	この後はキザミ→攻め→セメクズシ→ 乱拍子の順で各間には屋台2回を挟む
3	キザミ	5〜6回繰り返す
4	セメ	5〜6回繰り返す
5	セメクズシ	5〜6回繰り返す
6	乱拍子 (ランビョウシ)	6〜7回繰り返す
7	マモノ	何回叩いても良い
8	神田丸	1回叩く
9	下がり藤	1回叩く
10	鎌倉	何回叩いても良い
11	仕丁舞	仕丁舞の地※何回叩いても良い→“そうりゃ”の掛け声→仕丁舞の玉※3回叩く
12	神馬/ニンバ/ バカッ囃子	何回叩いても良い→乱拍子→ 屋台→キリバチ
13	キリバチ	太鼓が全て終わる時に叩く

青年会が成立していた当時、太鼓連は毎月1日と15日のモノビ(農休みの日)の昼間や、神社や寺の祭礼の前には連日夜中まで神社の境内や公会堂に集まって練習に励んだ。そして、とくに神社の祭礼では太鼓連が宵宮で太鼓を披露するほか、当日は神輿の巡行に従い山車に乗ってムラ中を練り歩いた。明治期には山車が2台あり、1台は太鼓を叩くためのもの、もう1台は仮面を被った若者達が「ひょっとこ踊り」などを踊りながら巡行するためのものであった。また、昭和20年(1945年)代まで下糟屋周辺のほかのムラの青年会とのあいだに「祭りづきあい」という付き合いがあった。他地区の祭日に太鼓連を中心とする青年会員が月番の準備する弁当を持ち太鼓を担いで行き、神社で太鼓を競争してナハを得てきたのである。この付き合いは成瀬村内では東富岡と行われたことがあるが、下糟屋と同様に太鼓連が組織された旧伊勢原町池端とはもっと親密な関係にあった。

こうした伝統を持った太鼓連も、昭和30年(1955年)頃の青年会の解散に伴って一旦組織を解体した。しかし、その後14、5年を経た昭和45年(1970年)頃から、若い人々の親睦団体が何もない下糟屋で親睦団体を作ろうという動きが特に30歳前後の青年層の間から現れ始め、その手段のひとつとして太鼓連の復活の声が徐々に持ち上がったのである。しかし、太鼓連を復活させるにも太鼓は既に傷みが激しく、法被(はっぴ)などの衣装もなく、さらに以前から伝わってきた太鼓、横笛などの曲調を十分に記憶している人もほとんどなかった。そのため復活は一時頓挫しがちになったが、橋本幸男氏を中心に青年層の相談役にあたった人々がリーダーとなって自治会の役員たちに話をもちかけ、昭和52年(1977年)の春からようやく復活した。その太鼓連は旧来のような青年層だけによるものではなく自治会の有志により組織され、初めは顧問11名、賛助会員1名、会員30名で再出発した。傷んだ太鼓の張り替えや衣装作り、また山車の修復などに要した金額は100万円近くに上がったが、一部自治会からの支出があったとはいえ大部分は「お前たちがやるのなら」と届けられた寄付金によっている。また再発足当時、横笛の曲調を伝承するのは亀井正男氏1名だけで、池端の人の指導も受けたのである。

再発足当時から太鼓連では太鼓・横笛・鉦などを小学生に習わせようという計画があったが、勉強を強いられる子供たちに太鼓連への参加を誘うことも難しかった。青年・中年層が昔からの音曲をマスターし得た頃にようやく7〜8人の高学年児童が太鼓連に参加し、すでに太鼓の叩き方だけは習得した。こうした児童を含めて太鼓連は約50名で組織されるようになり、会員は年額3000円の会費を納め、その会費と祭礼などであがるハナにより楽器などの維持と会の運営が賄われるようになった。昭和60年(1985年)頃から普済寺半僧坊の祭りが休止状態になり、8月の盆踊り・納涼大会や9月の祭礼に参加するために、太鼓連は主に夏休みから9月にかけて毎晩2時間ほど練習を繰り返し、祭礼の直前には深夜まで及ぶこともあった。当時は夜の練習ということで太鼓や笛の音がうるさいとの苦情もあり、練習の場所は人家から離れた畑のビニールハウスを借りていた時期もあった。

１２．青年会

成瀬地区においては明治44年(1911年)5月に成瀬村統一青年会が成立する以前から各集落に若者の組織があり、ムラの生活の中でさまざまな役割を担ってきた。この青年会に統一される以前の若者の組織は集落個々に名称を持ち、下糟屋では明治初期には一時「国民義勇軍」とも称したというが、明治40年(1907年)代には「若連」とよばれた。明治末の青年会はそれまでの伝統を受け継ぎ、大正10年(1921年)の官製的な「青年団」の成立後も、集落の青年会は一方で独自の歩みを進めたのである。

下粕屋の青年会は長男、二男を問わず15〜35歳の男子によって構成された。昭和30年(1955年)頃に解散するまでこの年齢幅は守られ、戦後の教育制度の改革後は中学2年生を終えると青年会に加入した。加入・脱退するのは1月15日の戦前には「お日待ち」と呼んだ集会の席であり、この集会は昭和12,13(1937,1938)年に公会堂が完成する以前には多人数が入れる大きな家を借りてカミとシモに分かれて行われた。この集会で役員の改選やその年の事業計画を話し合い、そのあとに新入りの者を会場の上座に据え、卒倒するまで酒を無理強いに飲ませて無礼講を開いた。青年会に加入すると「一人前」とみなされ、ムラの各種の共同労働で家を代表することができた。青年会の定期的な集会はこの1月15日のほか、5月5日(成瀬村青年会の創立記念日)、そして高部屋神社の祭礼の前後であった。

青年会の役員には会長・副会長・幹事の三役があり選挙で選ば

れ、通常は役員には 34,5 歳の年長者が選ばれた。青年会の内部では例えば集会などでの席順は年齢順が守られ、年が上であることがひとつの権威となった。しかし、神奈川県の沿岸地方に見られるような年齢層によって幾つかの段階に区別される内部の名称区分はない。青年会では 1 月の集会の時に全員が籤(くじ)をひいて「月番」を定め、当番の月には種々の役割を努めることになっていたが、15～35 歳までと構成員に年齢幅があるため、若い者、とくに新入りの者は年長者に何かと指示され下働きに追い回された。また 35 歳までは婿養子にきた者も加入し、年少者と同様の扱いを受けた。

青年会の会費の多くは青年会内部に組織された太鼓連に祭礼などであがるハナ(御祝儀)で賄われ、大正期から昭和の初期にかけては下糟屋字域内の田へ水を引く堀の土地を地主から借り、そこに会員が自宅から持ち寄った稲苗を植えて収穫し、その米を稲束のまま字内の家に買い取ってもらいこの金を会費に充てたこともあった。通常は 8 表、多い年には 10 表収穫でき、昭和初期の安いときで 1 表 13 円で売れた。

青年会の役割の中心は祭礼の準備と後片付け、そして祭礼の花形である神輿や山車の運行、余興の開催である。大正期までは若連ないし青年会に入ると義太夫を習い、祭礼の余興として披露し、またその頃には現在の厚木市愛甲から師匠を招き「三番叟」から始まる神楽や芝居を習って披露したこともある。昭和 30 年(1955 年)頃に青年会が解散したひとつの要因は、下糟屋内の道路に車の通行量が増し、高部屋神社の祭礼の時に青年会により長年立てられてきたカミ、シモ 2 ヶ所の幟が立てられなくなり、また神輿と山車の運行ができなくなったことという。山車の運行だけは太鼓連の人たちにより復活したが、重量があり担ぎ手に少なくとも 40～50 人を要する神輿の運行は青年会の解散により不可能になった。

これら祭礼の準備や遂行には青年会の成員がすべて参加し、祭礼の翌日に後片付けが済むと「ハチハライ」とよんで祭礼にあがったハナを計算し、祭礼の経費を差し引いた金と会費を出し合って、多くは伊勢原の料亭「伊勢作」を会場に慰労会をもった。明治の末まで下糟屋には旧宿場町の名残りとして「フカワ」・「イツツヤ」(屋号)など 2、3 軒の料亭が残っており、若者達は夜になるとこれら料亭の前の家に集まり、料亭の女中たちを冷やかしては主人に叱られた。時には水を掛けられたこともあり、そのような主人のところには祭礼の時に神輿を練り込ませ、憂さ晴らしをしたのだという。当時は休日に平塚などへ出て遊郭に足を運ぶ若者もあった。

青年会は祭礼に関する役割のほかに、例えば成瀬村の連合運動会など村や集落の各種の全体的な行事での活動の中心となった。また、成瀬村青年会の下部組織として文集作りやスポーツ活動など自主的な活動も盛んであった。

１３．雨乞いの儀

高部屋神社の社宝として還城楽面(げんじょうらくめん)・陵王面(りょうおうめん)・癋見面(べしみめん)の三面の古い伎楽面(ぎがくめん)が保存されており、これらは「雨乞い」または「雨乞いの儀」といわれる共同祈願に使用されていた。神社近くの東方に水神(水神さん)を祀った湧水池があり、日照りが続くと神官が祝詞を奏上し、古面をかぶった 2 人が互いに水をかけあって雨乞いをしたと伝えられている。最後に行われたのが昭和 8 年(1933 年)で、その前は大正 2 年(1913 年)であったという。昭和 8 年の雨乞いの儀は次のように行われた。

図 13-1. 昭和 8 年の雨乞い

図 13-2. 陵王面と癋見面

まず、面をつけて水の掛け合いを演じる「アマゴイ」と呼ばれる 2 名を世話人の話し合いで選出し、このアマゴイは年寄りで元気な人が選ばれた。また、雨乞いの儀が行われるときは、下糟屋の各戸から老若男女を問わず 1 人は出ることになっていた。一同は高部屋神社に参集し、アマゴイ役は社宝の面を着けて蓑を着て笠をかぶり、草鞋を履いて身支度を済ませると、拝殿でお祓いを受けてから行列をなして水神さんの池へ向かった。行列はアマゴイ 2 人を先頭にして、神主・総代・世話人が後に続き、さらに村人が付き従い、「龍王さん、龍王さん、雨降らせ給え」と口々に繰り返し唱えながら行進した。行列の進路は、神社→中宿→本宿→本宿・下宿の境→中宿・下北ノ根の境→上北ノ根・丸山の境→水神さんの池、であった。

行列が水神さんの池に到着するとアマゴイの 2 人が池の中に入って向かい合って立ち、神主が祝詞をあげてお祓いをする。それが済むとアマゴイが互いに「龍王さん、龍王さん、雨降らせ給え」と大声で唱えながら水の掛け合いをし、周りの人も「龍王さん、龍王さん、雨降らせ給え」と大声で唱える。これを暫く続け、神主の掛け声によって終了となる。「糟屋の雨乞いは必ず効く」といわれ、昭和 8 年の時は 7 日後に雨が降ったという。

下糟屋の雨乞いは昭和 8 年の『(区長)日誌』にも見え、この年は大旱魃の年であった。6 月 28 日の記録には「水田植付不能」とあり、水を得るための諸策がとられ、7 月 18 日に雨乞いが行われている。雨乞いの記述を下記に記す。

当字の雨乞いはやればあれると、めったにやらないからだらう、それを本日執行するのだ
午後三時より
1. やさか神社の祝詞(天王様の当日故)に始まり
2. 雨乞祈願の祝詞
3. 本日の雨乞の当人
　一、黒面　亀井作助
　二、赤面　近藤鉄五郎

蓑かさ新調して其れをまとひ、神社拝殿より岩本和三郎宅西の道を水神様に向ふ。「龍宮や龍宮や」と亀井作助いへば、「雨を降らせたもれ」と近藤鉄五郎応ず。古き神事であるらしい。水神様に至り、「のりと」ありて池にて二人の者、水をかけあひ、龍宮や龍宮や、雨をふらせたもれといひつつ、あびせる様、其の昔の神事しのばれていとも神々しくありたり。終わりて一同社ム所にて

神酒をいただく。参堂するもの五十人、子供七、八十人ありき。これで終わる。

雨乞い後の日誌では、7 月 27 日には僅かの雨が降ったが乾く方が早い位の雨だったとあり、8 月 3 日にも少ないが雨が降り、次いで 8 月 5 日には「午後二時、夕立たっぷり、川の水も増す」「明日はおしめり正月、やすみを出すことにせり」と記され、字の役員一同が雨乞いのお礼に区長宅を訪れ、8 日の晩には区長宅で雨乞いの会計を行うことを決めている。そして 8 日には「雨乞い費、御礼費合計約三十円認定す」とみえている。

雨乞いを行った後、あるいはそこまでいかなくても長い間晴れが続いた後に雨が降ると、「アメップリ正月」といって休みが出された。これもムラまたはムラのなかの集落が単位となって行われ、ほら貝を吹くなどして知らされ、午後から半日仕事が休みとなった。

１４．糟屋地区

高部屋神社は『延喜式』の神名帳に載せられた官社であるから、平安初期はもとより、それよりずっと以前から霊験あらたかなりと知られた神社であったと思われる。そして著名になった一つの理由としては当社が古代の交通路に面していたからであったと考えられる。相模の下流の相模平野の大部分がまだ沼沢であったころ、交通路の幹線としては箱根の足柄峠を超え、松田から音無川の渓谷を経て秦野に入り、それより善波峠を越えて笠窪・串橋を通って糟屋に至り、東北に進んで相模川を渡ったものと思われる。高部屋神社は糟屋の往還に直接面して鎮座しており、旅人はいずれもその前を通って当社に参拝して旅の安全を祈ったことから、その名もおのずから遠方に聞こえたと考えられる。

しかし、高部屋神社が神社としてもっとも勢力を持ち、広い信仰圏を保持した時期は、この付近が糟屋庄の中心地となり、当社が実力者であった糟屋庄司の厚い崇敬と庇護を受けるようになってからであろうと考えられる。当社はそのころには糟屋庄の惣社または大住大明神として、大住郡の代表的神社となっていたと思われる。

平安末期から鎌倉時代にわたって「糟屋庄」という大きな荘園（中央貴族や寺社による私的大土地所有の形態）があり、その範囲は大住郡の大部分におよぶほどで、相模国ではきわめて勢力のある荘園であったが、その中心地が「下糟屋」であった。この糟屋一帯の地域が『和名抄』に記載された相模国大住郡の諸郷のうちどの郷に属するかについては、村岡良弼氏の『日本地理志料』によると「日田郷」であるとしている。「三ノ宮、日向（ひなた）、糟屋、東富岡、上子安、下子安、坂本、大山の諸邑に亘って、糟屋ノ荘と称す。是れその地（日田郷）なり。」と記している。

１５．糟屋氏

糟屋庄の起源は平安中期にまでさかのぼる。左大臣藤原冬嗣五世の孫の如丘（ゆきたか）という者は相模の国司として下向したが、任期満了後も帰京せずに糟屋に居住し、合法非合法の手段を用いて私領の拡張を図った。その子の元方にいたって他からの侵略を防ぐため武器をとって武士となり、糟屋太郎元方と称し、その子孫は連綿として糟屋庄を領有した。糟屋氏の系図は次の通りである。

冬嗣―良方―常興―輔相―如丘―元方（糟屋太郎）―盛季（糟屋庄司）―久季（糟屋次郎）―家季（十郎兵衛家忠と改む）―義忠（岡本太郎）―光綱（糟屋庄司小太郎）―盛久（従五位以下筑後守）―久綱（糟屋庄司）―有季

糟屋元方より八世の孫の糟屋藤太兵衛尉有季は、祖父の業を継いで当庄の庄司となった。それとともに、新興武士の棟梁である源頼朝の家人となり、当地の地頭職に補せられ、頼朝・頼家の二代に仕えてしばしば功を立てたことが、『吾妻鏡』や『源平盛衰記』などに記されている。しかし、有季は比企官能員の女婿であったため、建仁 3 年（1203 年）の乱に組して敗れ、比企一族とともに自害して滅びた。高部屋神社の境内を含めた一帯の地を「丸山」と称し、この地に糟屋有季の居蹟があったと伝えられている。ここは東西 180m、南北 200m ほどで、今でもところどころに周囲の堀の遺形が残っており、この辺りの小名を「殿の窪」といっている。

有季の没後の承久 3 年（1221 年）に「承久の乱」が起こり、有季の子である左衛門尉有久は後鳥羽院の武者所に弟次郎長久とともに仕えていた関係から、後鳥羽上皇方に属して戦死した。しかし、三郎有近と弟の四郎久季は鎌倉幕府の軍中にあって功を立て、それぞれ上皇方の兵一名を討ち取っているので、有季の死後は 2 人のうちのいずれかが丸山の居館を維持していたと思われるが、もちろん糟屋庄司としての昔日の勢力は失われていたと考えられる。高部屋神社としてもその神威を誇っていた最盛期は糟屋有季のときまででであったと思われ、最盛期には当社は大住郡 127 ヶ村の総鎮守であったといわている。その範囲は大住郡のほとんど全域に及んでいたので「大住大明神」といわれ、また大住郡惣社とも称せられた。そのころには、毎月五と十の日に下糟屋において市が立ち、群集が集まって賑わったと伝えているが、おそらく当社を中心として市が立てられたと思われる。

享徳年間（1452～55 年）になると扇谷上杉の憲忠が古河公方の足利成氏と戦って糟屋に陣しており、さらに文明 18 年（1486 年）に上杉定正はその糟屋の居館に、功臣の太田道灌資長をあざむき招いてその風呂場で暗殺している。もっとも、そのときの定正の居館は下糟屋ではなく上糟屋にあったようで、石野瑛氏によれば定正の館址は上糟屋の中ほどの館原（やかたばら）というところにあり、東西四、五町（約 430～540m）ばかりで、四周に空濠をめぐらす一帯の台地で、東南に遠く相模平野を見下ろす形勝の地であるという。このように上杉定正の居館は上糟屋にあったが、これと隣接する下糟屋も当時は同じく糟屋と呼ばれ、上下の区別なく定正の支配下の領域となっていたと考えられることから、高部屋神社も前々から上杉家の庇護と崇敬を受けていたと思われる。しかし、定正が道灌を殺害した後は扇谷と山内の両上杉氏は不和となり、ついには互いに戦うに至った。上粕屋と西富岡の両部落にまたがって「実蒔原（さねまきばら）」とう高原があるが（現在の高部屋小学校の北方）、ここは両上杉の戦った古戦場であると伝えられている。そのころ、高部屋神社はおそらく戦火を受けてその社殿はまったくなくなったように思われる。その理由として道灌の死後 60 年余を経た天文 20 年（1551 年）に、時の地頭渡辺石

見守なるものが当社の社殿を再建造営したことが、そのときの棟札によって判明していることがあげられる。

江戸時代になると上下の糟屋村は何人もの徳川氏の御家人の分領するところとなって、高部屋神社としても勢力のある保護者を持つに至らなかったと思われる。明治以降においては郷社となり、下糟屋の鎮守として現在に至っている。

１６．太田道灌と道灌まつり

太田道灌は江戸城を創建し、文武両道の鑑(かがみ)として知られる戦国時代の武将である。伊勢原市内にあった上杉館で君主により暗殺されたといわれる。下糟屋の西部には大慈寺持ちの太田道灌の墓と伝わる一区があり、傍らには榎の大樹が繁っていた。上粕屋にも洞昌院持ちの墓があって胴塚とし、下糟屋の方は首塚と称している。下糟屋にはかつて糟屋荘の開発者糟屋氏系統の人物で源頼朝などに仕えた「糟屋左衛門尉有季」の居蹟なども残っており、旧家として亀井道怡家、山田亀吉、能条安左衛門家などが知られていた。鎌倉時代の御家人糟屋有季(かすやありすえ)の館は、高部屋神社の境内も含めて「東西百間余り(約 180m)、南北百十間余(約 200m)」に渡って広がっていたという。

図 16-1. 下糟屋の太田道灌公霊地

図 16-2. 首塚

図 16-3. 上粕屋の太田道灌公霊地

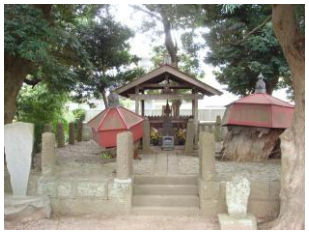

図 16-4. 胴塚

昭和31年(1956年)10月に東京で太田道灌が江戸城を築城して500年の経過を祝い、開都500年記念として「大東京祭」を開催した。当時の伊勢原町でもゆかりの地として同年10月に「道灌祭」を開催し、駅伝競走やのど自慢、義太夫大会などの行事を行ったのが道灌まつりの原点といわれている。その後は「七福神まつり」、「産業祭り」などと名称が変わり、昭和43年(1968年)に「町の総意を結集し、商工業の振興と観光の飛躍的展開を促すこと」を目的として開催した「観光まつり」が第1回目の道灌まつりとなった。

道灌まつりは「かながわのまつり50選」にも選ばれ、「太田道灌公鷹狩り行列」と「北条政子日向薬師参詣行列」では、著名人らがそれぞれ太田道灌と北条政子に扮してパレードが行われる。

１７．むすび

伊勢原市内には延喜式神名帳に記載されている相模国の13座のうち3社が鎮座し、式内社の数は神奈川県内の市町村では伊勢原市が最多となっている。更に、この3社が高部屋周辺に集中していることを考えると、旧大住郡の高部屋周辺は大山をシンボルとして、古くから相模国の重要な拠点であったことが伺える。なお、式内社に関しては論社(比定社)が存在するが、ここでは説明を割愛させて頂く。

残念ながら、このような歴史的な背景とは裏腹に、伊勢原市内の多くの神社の祭礼は衰退傾向にあり、高部屋神社の祭礼もまた例外ではない。しかしながら、平成元年(1989年)頃に高部屋神社の神輿会として「高神會」を結成し、更に、平成29年(2017年)には「汐汲み神事」を復活させるなど、高部屋神社に対する下糟屋の氏子の方々の強い想いが伝わってくるのである。

私自身、高部屋神社の歴史については文献調査である程度認識をしていたが、私の活動はどうしても祭礼に活気のある地区に偏ってしまい、地元である伊勢原市内の神社の祭礼を取材する機会は多くはなく、長い間、高部屋神社の祭礼を取材する機会はなかった。今回、高神會との繋がりをきっかけに高部屋神社の祭礼を取材させて頂くことができ、改めて高部屋神社とその祭礼の歴史の奥深さを認識した。

ほとんどの地区の祭礼に関して、少子高齢化や人口減少による後継者不足により、それらの運営は非常に難しい状況に直面しており、高部屋神社の祭礼も決して例外ではない。しかしながら、神社、神輿、太鼓などの各団体が試行錯誤して、同社の祭礼を運営している姿には強く感銘を受けた。今後もこの素晴らしい高部屋神社の祭礼が、末永く後世に引き継がれていくことを祈願したい。

○参考文献

1. 『伊勢原町勢誌』　伊勢原町勢誌編纂委員会　(1943)
2. 『伊勢原市の文化財　文化財調査報告書　第10号』　伊勢原町文化財保護委員会　(1970)
3. 『伊勢原市の指定文化財』　伊勢原市教育委員会社会教育課　(1978)
4. 『伊勢原市文化財協会資料集第二号　伊勢原市内社寺鐘銘文集』　古谷秀雄　(1980)
5. 『大日本地誌体系⑳　新編相模国風土記稿　第二巻』　雄山閣　(1985)
6. 『伊勢原市史民族調査報告書1　伊勢原の民族　-成瀬地区-』　伊勢原市史編集委員会　(1988)
7. 『伊勢原市史　ダイジェスト版』　伊勢原市史編集委員会　(2019)
8. 『池端から下糟屋　文化財の道を歩く　ガイドと歩こう「日本遺産　大山詣り」の道⑫』　雨岳ガイドの会　(2020)

作成 ： 2026年1月